

図版は参考として掲載しています。

※3F-2考古展示「日本の考古資料」(2025年1月2日～3月16日)では、図3の作品は展示されません。

# 博物館 Dictionary No.238

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

## 古墳時代の甲冑

### 人類と武器・武具

戦争などで使われる兵器は、攻撃用の武器と防御用の武具に分けられます。人類の歴史の中では戦いの開始と共に発明され、残念ながら現代まで絶え間なく発達してきました。

このうち武具には、人や馬が身に着ける甲冑とその不足部分を補う付属具の他に、盾や矢入具などがあります。身体を保護する甲冑は、頭部を護る冑と胴部を護る甲が中心です。

### 弥生・古墳時代甲冑の特徴

弥生時代には、木の厚い板を削った刳抜式甲と、薄い四角形の板を革紐で繋ぎ合わせた甲があります。

これに対し、古墳時代の甲は主に鉄製で、部品や製作技術に多くの種類があり、古墳からときおり出土することが明治時代から知られていました。

古墳時代は主に前期・中期・後期に分けられますが、まず前期(3世紀後半～4世紀後半)には縦長の鉄板(縦矧板)や四角形の鉄板を革紐で繋げた甲冑が作られました。前者は縦長の鉄板を鉄の鉾で固定する朝鮮半島の甲と似ていますが、部品を繋ぐ技術が大きく異なります。

一方、中期(4世紀後半～5世紀)には、統一された規格で带状の鉄板を使用する帯金式甲冑が作られました(図1)。正面に尖った部分をもつ衝角付冑と短甲を中心に、頸や肩を護る頸甲・肩甲、腰や太ももなどを護る草摺などの付属具を組合せた日本列島独自スタイルの甲冑(図2)で、帯金式甲冑は組み合う武器の種類(武装)からみても歩兵用の武具と考えられます。



図1 帯金式鉾留甲冑(衝角付冑・頸甲・短甲) 京都府 相楽郡和束町 原山古墳出土 古墳時代 5世紀 京都国立博物館蔵

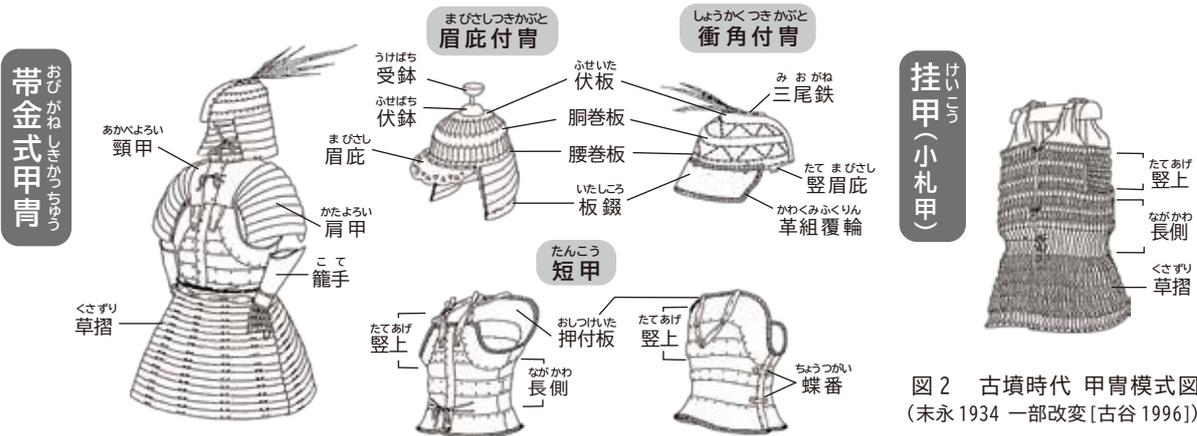


図2 古墳時代 甲冑模式図 (末永 1934 一部改変 [古谷 1996])

おびかねしきかつちゆう かわひも つな かわとしぎ ほう  
 帯金式甲冑は、はじめは弥生時代と同様な革紐で繋ぐ技術(革綴技法)を使って作られて  
 いましたが、5世紀中頃になると、鉾で固定する朝鮮半島の技術(鉾留技法)を取り入  
 れた量産品が作られるようになり、大陸のデザインを取り入れた新しいタイプの眉庇付  
 かぶと  
 冑も加わりました。これらは東北から九州地方の範囲で、その頃の日本列島で最も強い  
 力をもっていたヤマト王権おうけん※と関係が深いと考えられる古墳こふんから出土しています。

しかし、後期(6~7世紀)には、5世紀に大陸から伝わった乗馬の風習ともなに伴って、次第  
 けいこう よろい  
 に挂甲と呼ばれる甲に交代してゆきました。挂甲は大陸で発達した細かな鉄板(小札)を  
 くみひも かわひも つな しせい  
 組紐や革紐などで繋ぎ合わせているため、体の姿勢を大きく変えても全体が伸び縮みす  
 とくちよう  
 る特徴があり、乗馬にあった甲よろいとしてユーラシア大陸全体に広がっていました。このよ  
 うな挂甲(小札甲)の特徴は、平安時代に成立した大鎧おおよいと大変よく似ており、中世(鎌倉・  
 むらまちじだい えどじだい にほんしきかつちゆう きげん  
 室町時代)や近世(江戸時代)の日本式甲冑の起源となったと考えられています。

### こふんじだいかつちゆう 古墳時代甲冑の性格

こふん  
 古墳には、さまざまなものが死者と一緒に埋められました。なか  
 かつちゆう こふんじだい ふくそうひん  
 でも甲冑は、古墳時代の最初から副葬品として使われました。中期・  
 おびかねしきかつちゆう けいこう こぎねよろい  
 後期には、大量生産された帯金式甲冑や挂甲(小札甲)へと種類が移  
 かつちゆう ふくそう こふん  
 り変わりますが、甲冑はずっと副葬され続けました。古墳から出土  
 かつちゆう  
 する甲冑は、当時の人々がどのように戦ったのか、また、中国や朝  
 鮮半島の技術やデザインをどのように取り入れてきたのかを教えて  
 きちよう  
 くれる、貴重な資料といえます。

こふん かつちゆう  
 一方で、古墳から出土する甲冑には、実際の戦いには向かない形や、  
 かざ とくちよう かつちゆう  
 必要以上に飾りを加えた例もあります。このような特徴をもつ甲冑  
 かつちゆう  
 が見つかっているのは、重要なポイントです。これらの甲冑は、単  
 にかつちゆう  
 に戦いのための道具というだけでなく、当時の政治や社会を背景に  
 うつ  
 した、人々の考えや社会のしくみを映し出していると考えられます。

とくちよう かつちゆう  
 同じような特徴をもつ武具は、中世以降にもあり、甲冑を身に着  
 ぶしやう こふんじだい かつちゆう  
 けた武将の性格や思想をよく表しています(図3)。古墳時代の甲冑も、  
 こふんじだい  
 このように二つの側面をもつ武具だったと思われ、古墳時代の人々  
 きぐ てが  
 や社会が何を大切にしていたのかを探る重要な手掛かりになります。



図3  
 こりんとうろくじみょうごうすだてかぶと  
 五輪塔六字名号頭立兜  
 江戸時代 18世紀  
 京都国立博物館蔵

※3世紀後半頃~6世紀頃に、奈良盆地と大阪平野を中心として近畿地方に成立した古墳時代の政治的勢力(政権)。中国の歴史書に登場する5世紀の「倭五王」など。(考古室 古谷 毅)